

大阪インターナショナルチャーチ
2016年2月14日
ロジャー・ウィルモア師
タイトル：神を慕い求める心
聖書箇所：詩篇84：1-12

84:1 万軍の【主】。あなたのお住まいはなんと、慕わしいことでしょう。

84:2 私のたましいは、【主】の大庭を恋い慕って絶え入るばかりです。私の心も、身も、生ける神に喜びの歌を歌います。

84:3 雀さえも、住みかを見つけました。つばめも、ひなを入れる巣、あなたの祭壇を見つけました。万軍の【主】。私の王、私の神よ。

84:4 なんと幸いなことでしょう。あなたの家に住む人たちは。彼らは、いつも、あなたをほめたたえています。 セラ

84:5 なんと幸いなことでしょう。その力が、あなたにあり、その心の中にシオンへの大路のある人は。

84:6 彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。初めの雨もまたそこを祝福でおおいます。

84:7 彼らは、力から力へと進み、シオンにおいて、神の御前に現れます。

84:8 万軍の神、【主】よ。私の祈りを聞いてください。ヤコブの神よ。耳を傾けてください。セラ

84:9 神よ。われらの盾をご覧ください。あなたに油そそがれた者の顔に目を注いでください。

84:10 まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。

84:11 まことに、神なる【主】は太陽です。盾です。【主】は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれません。

84:12 万軍の【主】よ。なんと幸いなことでしょう。あなたに信頼するその人は。

中心となる聖句は2節です。「私のたましいは、【主】の大庭を恋い慕って絶え入るばかりです。私の心も、身も、生ける神に喜びの歌を歌います。」

これは、神への愛を麗しく表現した詩です。神を愛していると言うことと、神への愛を表現することは、別のことです。詩篇84篇はコラの子たちの賛歌ですが、神を慕い求める心の言葉です。コラの子たちは幕屋とその調度品の世話係でした。詩篇84：10には、神の家に対するコラの子たちの愛着が感じられます。「まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまさります。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。」

スポルジョンは次のように語りました。「詩篇23篇はもっとも親しまれた詩篇かもしれないが、103篇はもっとも喜びに満ちた詩篇、119篇はもっとも新しい試みの詩篇、51篇はもっとも悲しみに満ちた詩篇、そしてこの84篇は、もっとも甘美な平安の詩篇である。」

スコットランドの優れた説教者で執筆家であったグレーアム・スクロギー師は、詩篇84篇についてこのように記しました。「この詩篇は、神殿とその儀式が制定されたとき、神殿への巡礼が国民の生活の一部となったときに書かれたものと考えられる。」続けてスクロギーは、興味深い見解を述べています。「そこには明らかな期待と喜びが息づく。冒頭から、長い間閉ざされていた思いが関を切ったようにあふれ出ている。」

スクロギー師の見解を念頭に、2節を見てみましょう。全能の神への愛情にあふれた心を思い描きながら、もう一度読みましょう。「私のたましいは、【主】の大庭を恋い慕って絶え入るばかりです。私の心も、身も、生ける神に喜びの歌を歌います。」詩篇の著者が、気持ちをうまく現す

言葉を探している様子が思い浮かびます。言い換えると、「私のたましいは慕います・・・いやそれどころか卒倒しそうです。私の心も体も生ける神を求めています。」ということです。この言葉が表わす気迫を見逃さないでください。

この詩篇は、神を慕い求める心を表す詩篇であることは間違いありません。英語の新国際訳で、2節のこの部分は、「私のたましいは慕い焦がれます。」と訳されています。

「慕い焦がれる」という表現は、とても素敵だと思います。あまり日常会話では使いませんが、すばらしい言葉です。強く激しく求める気持ちを表しています。

求める気持ちは、クリスチャンとして生きる上でとても大切なことです。ある人が特定のことを求めるか求めないかで、その人の霊性をはかることもできます。

求める気持ち、つまり願望について少し考えてみましょう。言葉は適当に取りつくろえます。口先だけでクリスチャンらしい言葉を使って説得力のあることを言うこともできます。行動も同じです。クリスチャンぶく振る舞うことはできます。いわゆる偽善者です。

たくさんのことを偽れても、求める気持ちは偽れません。求める気持ちとは、神を愛する心の表れだからです。求める心は、その人の本心を映すのです。

ずいぶん昔の話ですが、私が大学生だったとき、ある聖会に参加しました。そこでは、英国の説教者スチュアート・ブリスコー師がメッセージを語っていました。信仰の歩みの浅かった私は、主をもっと近い存在として知りたいと願っていました。メッセージの内容は細かく覚えていませんが、そこで語られたある言葉が私の心に突き刺さりました。以来、一度も忘れたことがありません。それは、こんな言葉でした。「神はその人の求める心に応じて出会ってくださる。人は求めれば求めただけ神を知ることができる。」

40年以上前に聞いたその言葉は、今も私の心にしっかりと焼き付いています。皆さんも私も、人は誰でも神を求めれば求めただけ、神を知ることができるのです。

自分が神の子かどうか知りたいと思うなら、神を求める心があるか考えてみればよいでしょう。神を求める心が、その人の状態を映すからです。

神を求める心は、些細なことに現れます。詩篇の著者は3節で、「84:3 雀さえも、住みかを見つけました。つばめも、ひなを入れる巣、あなたの祭壇を見つけました。」と語り、神殿の片隅に巣を作る小鳥を羨みます。神のご臨在につねに触れることができる小鳥たちを羨む著者の気持ちがわかるでしょうか。

この詩篇は3つの部分に分かれています。

第一部：1-4節、最初のセラで締めくくられている。
第二部 5-8節、ふたつめのセラで締めくくられている。
第三部：9-12節

第一部：詩篇の著者が神の家に対する愛着を表現する。（1-3節）
1節には、「万軍の【主】。あなたのお住まいはなんと、慕わしいことでしょう。」とあります。
2節は、「私のたましいは、【主】の大庭を恋い慕って絶え入るばかりです。」です。

しかし、著者が心から慕っていたのは、その場所ではなく、そこにおられるお方ご自身です。

なぜ詩篇の著者は、神のお住まいにいたいと慕い求めたのでしょうか。なぜ、神の家に住む鳥たちを羨んだのでしょうか。それは、建物に入れるからではありません。神のみそばにいられるからです。

もちろん、礼拝をしやすい場所というものがありますが、礼拝は場所が主体ではありません。その対象は神です。

主の庭に心が惹かれるのは、そこに生ける神が住んでおられるからです。神のご臨在が人を惹きつけるのです。

何年も前のことですが、私はあるとき、ケニアのモンバサを訪れました。そこで現地の宣教師から、遠方の未開地に開拓した新しい教会まで同行してほしいと頼まれたので、喜んで引き受けました。翌日、予定の時間に向こうにたどり着くため、ずいぶん朝早くに出かけました。延々と車を走らせ、車道などないところまでやってきました。しばらくすると、道なき道を進むことになりました。到着した場所は、低木の点在するサバンナでした。宣教チームが最近この場所に礼拝所を建てたのでした。その場所は、数本の柱にトタン屋根という質素なものでした。私たちが到着したとき、そこにはまだ2-3人しかいませんでした。しばらくして、ひとりまたひとりと人々が集まり始めました。宣教師によると、この中には夜明け前に家を出て何時間もの道のりを歩いてやってくる人もいるとのことでした。なぜでしょう。何もない片田舎にトタン屋根の礼拝所があるからでしょうか。そんなことはありません。人々が、この礼拝所で天の神にお会いできると確信していたからです。私はこの日のことを忘れません。宣教師は私に、体力と声が持ちこたえられる限り何時間でもメッセージを語ってくださいと言いました。世界中で、こんなふうに言われたことは一度もありません。

多くの聖書学者が詩篇 84 篇の巡礼者について語ります。神のお住まいに巡礼のために旅する人々のことだと解説します。一方、フィラデルフィアの第十長老教会の元牧師であった今は亡きジェームス・モンゴメリー・ボイス師は、まったく違った視点から解説しました。ボイス師は記します。この詩篇はエルサレムに巡礼のために上っていく巡礼者を描いたものではない。スズメやつばめも、詩篇の著者を描いたものではない。神の家から遠く引き離されて帰れる日を待ち望む人々についてでもない。ボイス師は語ります。この詩篇は、すでに神の家にいる人たちについて描かれたものである。すでに神の家において、神の家で仕えていながらなお、たましいが強く神を慕っていることを描いた詩篇であると語ります。

礼拝している人たちは、神の家から引き離されて、そこに行きたいと強く願っているのでしょうか。それとも、すでに神の家において、そこにいられる特権を深く感謝しているのでしょうか。どちらが正しいのでしょうか。

私は、どちらが正しいかはあまり重要ではないという結論にたどり着きました。というのも、本物のクリスチャンなら誰もが、神の家から離れていれば、神の家にいたいと心から思うはずだからです。同様に、本物のクリスチャンなら誰もが、神の家にいるときは、そこにいられることを感謝し、神への愛にあふれて喜ぶでしょう。

皆さんはどうですか。神の家にいないとき、そこにいたいと強く願いますか。礼拝や交わりのおときを楽しみに待ちますか。

神の家にいるときはどうでしょう。礼拝や交わりのおとき、幸せだと感じますか。神の家にいるのが楽しいですか。

それが問題です。

第二部：詩篇の著者が自身の巡礼の旅路を表現する。（5-8 節）

この詩篇に「幸い」という単語が 4 節、5 節、12 節と 3 度登場します。これは幸せという意味があります。詩篇の著者は、神の家への巡礼の旅を求める人は幸せ、幸せ、幸せだと言っているわけです。

翻訳者たちは、5 節の後半の意味の解釈に苦勞するようです。新改訳では「その心の中にシオンへの大路のある人は。」とあります。

新共同訳は「あなたの家に住むことができるなら」
英語の新国際訳は「その心に巡礼をおく人は。」

5 節の言葉を完全に理解するのは難しいでしょう。フランス人神学者ルイ・スゴンは、この個所について洞察に満ちた見識を示しました。スゴンは 5 節について、「巡礼者たちは心の中にその道をすでに描いている」と解釈できると語ります。

このフランス人神学者が言っているのは、神がすべてのクリスチャンの心の中に GPS システム、いわゆるナビを備えておられるということです。

神を見つけるのはむずかしくはありません。私たちが心と精神を尽くして神を求めるなら神にお会いできる、と主は約束してくださっています。（申命記 4：29）

私は長年牧師として仕えさせていただいているので、クリスチャンの埋葬のために墓前に行ったことが何度もあります。墓前で式の締めくくりには、「鳩の儀式」と呼ばれるものが行われることがしばしばあります。「鳩の儀式」の執行者は、美しい鳩のたくさん入った鳥かごを手にしています。その中から一羽を取り出し、遺族の一人に手渡します。執行者は、「鳩の儀式」が象徴する意味について参列者に説明した後、鳩をかごから放します。鳩は皆、お墓の場所を旋回します。何度か旋回した後、大空へと飛んでいきます。

ある日、「鳩の儀式」の執行者に、どこから来たのか尋ねました。すると、埋葬地から遠く離れた町だと言います。私が、先ほど放した鳩たちはどうなるのかと尋ねると、「ご心配なく。私が帰るより前に、鳩たちは帰ってきますよ。」と答えました。どうやって帰り方がわかるのでしょうか。神は鳩の心にナビを装着されたに違いありません。あの鳩たちは、家に帰る方法を知っているのです。

神は、すべてのクリスチャンの心の中に「神ナビ」を装着してくださいました。だから私たちは神のご臨在に惹かれるのです。神のご臨在に飢え渴くのです。

6 節は、私たちクリスチャンの旅路は常に楽ではないことを示します。いつも平坦な道とは限りません。6 節をご覧ください。「彼らは涙の谷を過ぎるときも、」「涙の谷」と訳された部分は、もともと「バカの谷」ですが、そこは荒野で、悲しみや涙の場所だったのです。

キリストに従うのは簡単で苦痛知らずだと聞いたことがありますか。

クリスチャンとして生きることは、簡単ではありません。悩んだり孤独になったりすることがあります。けれども、そんな「バカの谷」でも、主は私たちに雨と元気と励ましを与えてくださいます。

使徒 16 章で、パウロとシラスは捕らえられて鞭打たれ、投獄されました。暗い牢屋の中で、ふたりをとおしてイエスの光が輝きました。寂しい場所でしたが、ふたりは孤独ではありませんでした。

た。主がともにおられたからです。牢屋はうめきや叫びが似つかわしい場所ですが、パウロとシラスは賛美の場所に変えました。

ジョン・バニヤン著の「天路歷程」は、秀逸な作品で、聖書に次ぐ売り上げを誇る古典文学です。ジョン・バニヤンは、ロンドンのベッドフォードにある監獄に収監中、「天路歷程」を著しました。バニヤンが投獄されたのは、福音を宣べ伝えたからです。彼は自分の境遇を憂いて怒りや恨みを募らせることもできたでしょう。しかしそうはせず、彼にとっての「バカの谷」を祝福の場所にしたのです。

試練や苦難に遭わずに神を追い求める人はいません。

第三部：詩篇の著者が神の家を喜ぶ。（9-12 節）

最後に、神の家にあるべき喜びに注目したいと思います。この最終部分は、コラの子たちが誰だったのかについてヒントを与えてくれます。そのひとりがこの詩篇の著者です。このようなすばらしい詩篇を書けるのは、どんな人でしょう。著者はコラの子です。

歴代誌第一 26 章を読むと、コラの子たちはレビ族の第三番目の氏族であることがわかります。彼らは門衛に任命されました。現代の言葉に言い換えると、「家政婦」「管理人」「清掃係」と言えるでしょう。とても地味な仕事ですが、任命されたコラの子たちはとても有能で、体も強く、知恵のある助言者というりっぱな人たちでした。

神のご臨在の前で地味な奉仕をすることは、他の場所で千年生きるよりもすばらしいのです。

彼らは、悪の天幕に住むより、神の家の門衛になりたいと語ります。

あなたははどうでしょう。神の家で神のご臨在の前で神にお仕えしていて幸せですか。

あなたが求める度合いが靈性に現れます。

先ほども申し上げたように、スチュアート・ブリスコー師は「神はその人の求める心に応じて出会ってくださる。人は求めれば求めただけ神を知ることができる。」と言いました。

今日、皆さんのうちにある神を求める心が呼び覚まされるようお祈りします。皆さんがここを出るとき、今まで以上にもっと神を近しく深く知りたいと願っておられますように。

「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。」というエレミヤ 29：13 のみことばが思い浮かびます。

主よ、あなたを求める心を起こしてください、と祈りましょう。

祈り